

下小池遺跡 2 大日遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 18 年 3 月

国土交通省 常総国道工事事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第252集

しも こ いけ
下 小 池 遺 跡 2
だい にち
大 日 遺 跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 18 年 3 月

国土交通省 常総国道工事事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

首都圏中央連絡自動車道の建設は、首都圏の中核都市を相互に結ぶことにより地域の核となる都市群を形成し、さらにこれらの地域における交通の円滑化を図り、地域の自立性を高める拠点となる都市整備を目的として計画されたものです。

この事業予定地内には埋蔵文化財包蔵地である下小池遺跡・大日遺跡が所在しています。

財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所から埋蔵文化財発掘調査についての委託を受け、平成16年4月から同年5月まで発掘調査を実施しました。

本書は、下小池遺跡、大日遺跡の調査成果を収録したものです。本書が学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、阿見町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 稲葉 節生

例 言

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16年度に発掘調査を実施した、茨城県稲敷郡阿見町大字下小池に所在する下小池遺跡及び茨城県稲敷郡阿見町大字吉原に所在する大日遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 両遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。
調 査 平成16年4月1日～平成16年5月31日
整 理 平成17年4月1日～平成17年5月31日
- 3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。
首席調査員兼班長 荒井 保雄
主任調査員 綿引 英樹
同 高野 裕壺
- 4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第一課長瓦吹堅のもと、主任調査員綿引英樹が担当した。

凡 例

- 1 下小池遺跡及び大日遺跡の地区設定は、それぞれ日本平面直角座標第IX系座標に準拠した。

下小池遺跡はX軸=-800m, Y=+32,760mの交点, 大日遺跡はX軸=-1,520m, Y=+35,480mの交点をそれぞれ基準点(A1a1)とした。2遺跡ともそれぞれの基準点を基に、遺跡範囲内を東西・南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C..., 西から東へ1, 2, 3...とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa, b, c..., 西から東へ1, 2, 3...とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A1a1区」、「B2b2区」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯及び東経の覧には、世界測地系に基づく緯度・経度を()を付して併記した。
3 本文及び実測図、遺物観察表で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI—住居跡 SK—土坑 SD—溝跡 P—柱穴

遺物 P—土器 TP—拓本土器 DP—土製品 Q—石器・石製品 M—金属製品

土層 K—攪乱

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。


- 6 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。


(1) 遺構全体図は300分の1、遺構実測図は60分の1に縮尺して掲載した。

(2) 遺物実測図は原則として3分の1で掲載した。種類や大きさにより異なる場合があり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

 焼土・火床面

 棚粘土・繊維土器断面

 竈部材(粘土)・炭化材

 油煙・煤

● 土器 ○ 土製品 □ 石器・石製品 △ 金属製品

- 7 遺物観察表及び遺構一覧表の作成方法については、次の通りである。

(1) 遺物番号は通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。

(2) 計測値の単位はcm及びgで示したが、大きさにより異なる場合もありそれらについては個々に単位を表示した。

(3) 遺物観察表及び遺構一覧表とも、()は現存値、[]は推定値であることを示している。

(4) 備考欄には、土器の現存率及び写真図版番号の他に、必要と考えられる事項を記した。

- 8 「主軸」は、竈を持つ竅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸」及び「長軸」方向は、それぞれの軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

抄 録

ふりがな	しもこいけいせきに だいにちいせきに							
書名	下小池遺跡 2 大日遺跡 2							
副書名	一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	IX							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第252集							
著者名	綿引 英樹							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587							
発行日	2006(平成18)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
下小池遺跡	茨城県稲敷郡阿見町 大字下小池字道儀 1410番地の53	08443 — 075	35度 59分 20秒 (35度 59分 31秒)	140度 11分 58秒 (140度 11分 46秒)	18 ~ 25m	20040401 ~ 20040531	48㎡	一般国道468号 首都圏中央連絡 自動車道事業に 伴う事前調査
大日遺跡	茨城県稲敷郡阿見町 大字吉原字馬立 1712番地の1ほか	08443 — 082	35度 59分 06秒 (35度 59分 17秒)	140度 13分 37秒 (140度 13分 25秒)	15 ~ 26m	20040401 ~ 20040531	503㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
下小池遺跡	集落跡	古 墳	竪穴住居跡 1軒	土師器(高坏・壺・甕)				
大日遺跡	集落跡	平 安	竪穴住居跡 2軒	土師器(坏・甕・小形甕)			第17号住 居跡から 「佛」と刻 書された土 師器の甕片 が出土して いる。	
				須恵器(坏・高台付坏・盤・蓋・鉢・ 甕・甎) 墨書土器, 土製品(紡錘車・支脚・不明土製品) 石器(尖頭器・剥片) 金属製品(刀子・鎌・刀装具)				
	時期不明	竪穴住居跡 1軒	縄文土器片, 弥生土器片, 土師器片, 須恵器片					
その他	時期不明	土坑 溝跡	9基 1条					
要 約	下小池遺跡では古墳時代前期の住居跡が検出された。また、大日遺跡では住居跡が3軒検出され、内2軒は竪の右側や左右に粘土を貼った棚状施設が確認された。							

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 下小池遺跡	5
第1節 遺跡の概要	5
第2節 基本層序	5
第3節 遺構と遺物	6
1 古墳時代の遺構と遺物	6
竪穴住居跡	6
第4節 まとめ	8
第4章 大日遺跡	11
第1節 遺跡の概要	11
第2節 基本層序	11
第3節 遺構と遺物	12
1 平安時代の遺構と遺物	12
竪穴住居跡	12
2 その他の遺構と遺物	21
(1) 竪穴住居跡	21
(2) 土坑	22
(3) 溝跡	23
(4) 遺構外出土遺物	24
第4節 まとめ	26
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

国土交通省は、首都圏全体の発展と交通の円滑化を図るために、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道の建設を進めている。

平成12年6月5日、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所（現常総国道事務所）長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事事業地内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会した。

これを受けて茨城県教育委員会は、平成12年6月12～13日に下小池遺跡、同年8月12～13日に大日遺跡の現地踏査をそれぞれ実施し、平成13年11月11～13日及び26～28日に下小池遺跡、同年12月5～6日に大日遺跡の試掘調査をそれぞれ実施し、遺跡の所在を確認した。平成14年1月17日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所長に対して、事業地内に下小池遺跡及び大日遺跡が所在する旨を回答した。

平成14年2月25日、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は、計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、同年2月26日、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所長に対して、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。





平成15年12月12日、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、一般国道468号首都圏中央連絡自動車道事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。平成16年1月7日、茨城県教育委員会教育長は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所長に対して、下小池遺跡及び大日遺跡について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として、財団法人茨城県教育財団を紹介した。

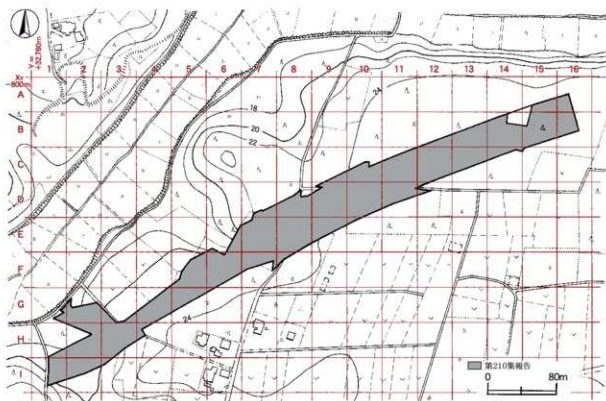
財団法人茨城県教育財団は、国土交通省関東地方整備局常総国道工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成16年4月1日から同年5月31日まで下小池遺跡及び大日遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

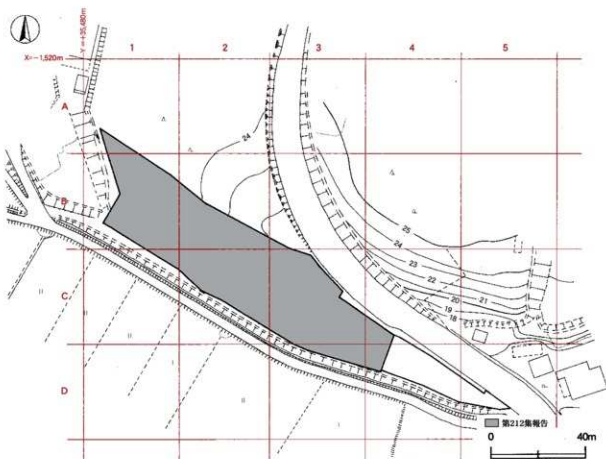
下小池遺跡及び大日遺跡の調査は、平成16年4月1日から同年5月31日まで実施した。

以下、その概要を表で記載する。

工程	期間	4月	5月
調査準備 遺構除 去確認			
遺構調査			
遺物洗 浄 注記 写真 整理			
補足調査 撤収			



第1図 下小池遺跡調査区設定図



第2図 大日遺跡調査区設定図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

下小池遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字下小池字道儀1410番地の53に、大日遺跡は、同町大字吉原字馬立1712番地の1ほかそれぞれ所在している。

これらの遺跡が所在する阿見町は、常総台地の一部をなす稲敷台地の北東部と、清明川、桂川、乙戸川などの流域及び霞ヶ浦沿岸の沖積低地からなっている。稲敷台地は、新生代第四期洪積世古東京湾時代に堆積した海成の砂層である成田層を基盤とし、その上に竜ヶ崎層と呼ばれる斜交層理の顕著な砂礫層、さらに常総粘土層と呼ばれる泥質粘土層（0.3～5.0m）、褐色の関東ローム層（0.5～2.0m）が連続して堆積し、最上部は腐植土層となっており、台地面は上記の各河川によって開析され、複雑な樹枝状の支谷が刻まれている。

下小池遺跡は、町城南西部、標高約23mの乙戸川左岸台地縁辺部に位置しており、北西には乙戸川の低地から伸びる支谷が入り込んでいる。また、大日遺跡は、桂川及びその支流が形成した支谷に延びた標高15～26mほどの段丘部と台地上に位置している。それぞれの遺跡の調査前の現況は山林及び畑地である。

第2節 歴史的環境

今回の調査で、下小池遺跡では古墳時代の住居跡が、大日遺跡では平安時代の住居跡が検出された。ここでは、関連する主な遺跡について簡略に述べる。

古墳時代の主な遺跡は、下小池遺跡(①)の他に、中久喜遺跡(3)、実教寺子遺跡(4)、実教寺子西遺跡(5)、反子遺跡(6)、大高出遺跡(7)、実教古墳群(8)がある。下小池遺跡は、平成14年度に1次調査が行われ、古墳時代の堅穴住居跡が47軒検出された¹⁾。実教古墳群では、中期の堅穴住居跡7軒、後期の円墳が4基確認され、土師器や須恵器、ガラス小玉、鉄製品(直刀、鉄鍔)などが出土している²⁾。中久喜遺跡でも古墳時代中期の住居跡が43軒検出されている³⁾。

奈良時代・平安時代の主な遺跡は、大日遺跡(②)の他に、下小池遺跡、手接遺跡(9)、花房遺跡(10)、などがある。平成14年度に調査された手接遺跡、花房遺跡、大日遺跡の3遺跡からは、合わせて4基の火葬墓が検出され、当時の葬送儀礼を知る上で有効な資料となっている⁴⁾。中でも、大日遺跡では2基が隣接するように確認され、猿投産の灰釉陶器の短頸壺と長頸壺をそれぞれ骨蔵器としている。

※ 文中の〈 〉内の番号は、第3図、表1の該当遺跡番号と同じである。

註

- 1) 小竹茂美「下小池遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第210集 2004年3月
- 2) 浅野和久「荒川本郷地区特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅰ) 実教古墳群・実教寺子遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第144集 1999年3月
- 3) 荒井保雄「牛久市北部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(Ⅱ) 中久喜遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第86集 1993年3月
- 4) 綿引英樹・後藤孝行「谷ノ沢遺跡・手接遺跡・花房遺跡・大日遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集 2004年3月



第3図 下小池・大日遺跡周辺遺跡分布図(国土地理院5万分の1「土浦」・「龍ヶ崎」)

表1 下小池遺跡及び大日遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代					
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・中世			近世	旧石器	縄文	弥生	奈・中世	近世
①	下小池遺跡	○	○	○	○		6	反子遺跡				○		
②	大日遺跡	○			○		7	大高田遺跡				○		
3	中久喜遺跡	○	○		○		8	実穀古墳群	○			○		○
4	実穀寺子遺跡	○	○		○		9	手接遺跡	○			○	○	
5	実穀寺子西遺跡	○		○			10	花房遺跡	○	○	○	○		

第3章 下小池遺跡

第1節 遺跡の概要

下小池遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字下小池字道儀1410番地の53に所在し、乙戸川左岸の標高約18～25m前後の台地上に立地している。平成14年度には29,782㎡が調査され、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代の竪穴住居跡1軒、古墳時代の竪穴住居跡47軒、土坑11基、平安時代の竪穴住居跡26軒、土坑1基、近世の炭焼き窯跡1基の他に、時期不明の土坑32基、井戸跡1基、溝跡3条、道路跡1条、不明遺構1基、遺物包含層1か所などが確認され、古墳時代中期を中心とした旧石器時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。出土遺物は、弥生土器片、土師器（坏・埴・高坏・壺・甕・甔）、須恵器（坏・高台付坏・高坏・甕・甔）、土製品（球状土錘・紡錘車）、石器・石製品（尖頭器・石織・石製模造品・砥石）、鉄製品（刀子）などが出土している。

今回の調査面積は48㎡で、調査前の現況は山林である。調査の結果、古墳時代の竪穴住居跡1軒が確認された。遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱分が出土した。主な出土遺物は、土師器（高坏・壺・甕）である。

第2節 基本層序

14年度の調査でF5j7区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は24.1mで、地表面から3mほど掘り下げ、第4図のような堆積状況を確認した。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

第1層は、極暗褐色の腐植土層である。ローム粒子をわずかに含み、粘性・締まりはともに弱く、層厚は36～56cmである。

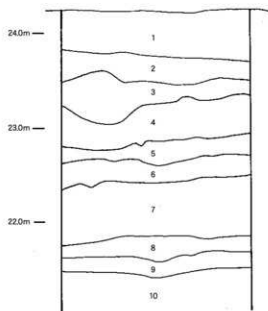
第2層は、明褐色のソフトローム層であり、粘性・締まりは普通で、層厚は16～32cmである。

第3層は、褐色のソフトローム層であり、粘性・締まりは普通で、層厚は11～58cmである。

第4層は、褐色のハードローム層であり、赤色粒子、黒色粒子を微量含んでいる。粘性は普通で締まりは強く、層厚は28～49cmである。

第5層は、褐色のハードローム層であり、黒色粒子を微量含み、第4層よりやや色味が強い。粘性・締まりともに強く、層厚は7～25cmである。

第6層は、暗褐色のハードローム層であり、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりともに強い。層厚は18～29cmで、第2黒色帯に相当すると考えられる。



第4図 基本土層図

第7層は、褐色のハードローム層であり、粘性・締まりともに強く、層厚は58～62cmである。

第8層は、にぶい褐色のハードローム層であり、赤色粒子、黒色粒子を微量含んでいる。粘性・締まりともに極めて強く、層厚は14～28cmである。

第9層は、明褐色のハードローム層であり、白色粒子、黒色粒子を中量含んでいる。粘性は普通で締まりは強く、層厚は10～20cmである。

第10層は、にぶい黄褐色の粘土層であり、粘性・締まりともに極めて強い。層厚は40cm以上あり、下層は未掘のため、本来の厚さは不明である。

住居跡・土坑等の遺構は、第2層上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡が1軒確認された。

第75号住居跡（第5・6区）

位置 調査区東部のA14h7区で、標高24.1mほどの平坦な台地上に位置している。

規模と形状 北側は調査区域外へ延びているため北側コーナー部を確認することができなかったが、長軸4.76m、短軸3.91mの隅丸長方形で、主軸方向はN-42°-Eである。壁高は12cmで、各壁ともやや外傾して立ち上がっている。

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。壁溝が周回している。

炉 北東寄りに1か所検出された。長径86cm、短径59cmの楕円形で、床面を浅い皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は凹凸で、火を受けて赤変硬化している。

伊土層解説

- | | |
|-----------------------|--------------|
| 1 にごり地 焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 3 赤褐色 焼土粒子中量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子少量、ローム粒子微量 | |

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長軸92cm、短軸71cmの楕円形で、深さは21cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

貯蔵穴土層解説

- | | |
|---------------|--------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子少量 | 3 褐色 ローム粒子中量 |
| 2 褐色 ローム粒子少量 | |

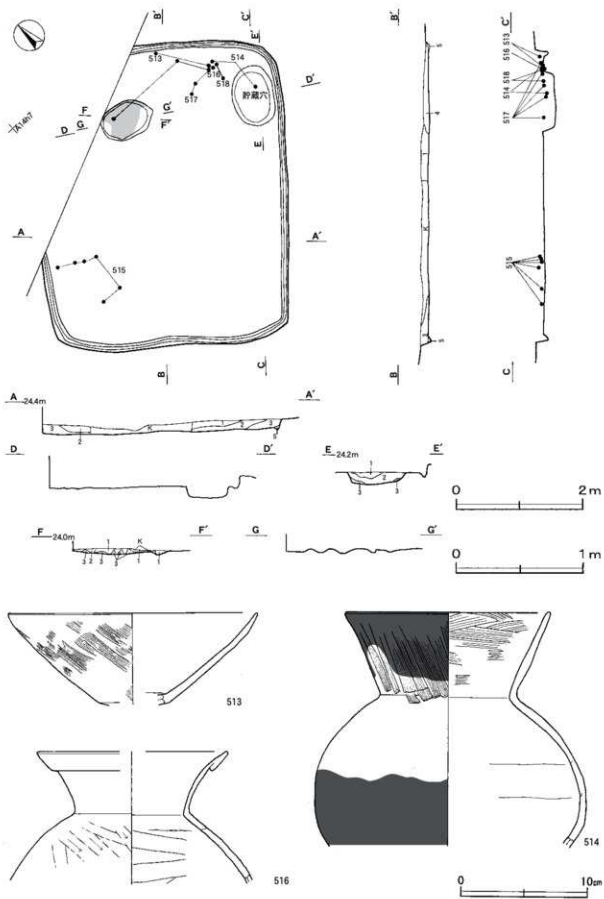
覆土 5層に分層される。ロームブロックなどを含む人為堆積である。

土層解説

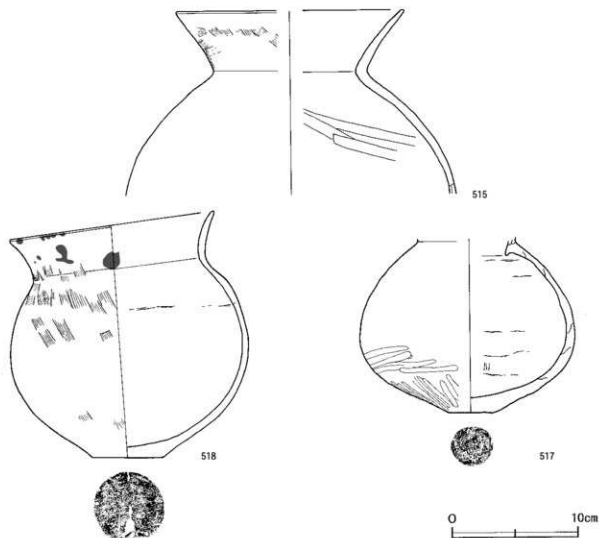
- | | |
|----------------|----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量 | 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量 | 5 暗褐色 ローム粒子中量 |
| 3 褐色 ロームブロック少量 | |

遺物出土状況 土師器片152点(坏1, 器台1, 甕類150)の他に、耕作による攪乱で混入した陶磁器片2点(碗類)、礫1点が出土している。遺物は、貯蔵穴付近や炉跡付近から多く確認されており、513・514、516～518は北東側壁の床面、515は北西コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。

所見 時期は、出土土器や遺構の特徴などから、4世紀前半と考えられる。



第5图 第75号住居跡・出土遺物実測図



第6図 第75号住居跡出土遺物実測図

第75号住居跡出土遺物観察表(第5・6図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
513	土師器	高坏	19.6	(7.3)	—	長石・石英	橙	普通	坏部外面ハケ目調整後ナデ、内面厚調整不明	床面	30%
514	土師器	壺	16.0	(18.5)	—	長石・石英	に深い橙	普通	体部外面ヘラナデ、口辺部内・外面ヘラナデ後ハケ目調整、体部外面中位・口辺部外面輝付着、輪積み痕	床面	50% PL2
515	土師器	壺	[18.0]	[14.6]	—	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	体部外面厚調整不明、口辺部外面ハケ目調整後ナデ	床面	40% PL2
516	土師器	壺	[15.0]	(10.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	体部外面ヘラ削り後ナデ、口辺部内・外面ナデ、輪積み痕	床面	20% PL2
517	土師器	壺	—	(13.8)	3.3	長石・石英・雲母	明黄橙	普通	体部外面下部ヘラ磨き、体部外面上端厚調整不明、輪積み痕	床面	50%
518	土師器	甕	16.4	19.6	5.7	長石・石英・赤色粒子	に5%橙	普通	体部外面ハケ目調整後ナデ、口辺部内・外面ハケ目調整後横ナデ、口唇部・口辺部外面輝付着、輪積み痕	床面	80% PL2

第4節 ま と め

下小池遺跡は平成14年5月から平成15年1月にかけて29,782㎡が調査され、『茨城県教育財団文化財調査報告書』第210集として報告されている(以下、『下小池遺跡¹⁾』と略す)。

『下小池遺跡』では、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代後期後葉の竪穴住居跡1軒、古墳時代前期の竪穴住居跡9軒、土坑2基、古墳時代中期の竪穴住居跡38軒、土坑9基、平安時代の竪穴住居跡26軒、土坑1基、近

代の炭焼窯跡1基の他に、時期不明の土坑32基、井戸跡1基、溝跡3条、道路跡1条、不明遺構1基、平安時代を主体とした遺物包含層1か所が検出されている。遺跡の中心となる時期は古墳時代であり、中でも古墳時代中期の竪穴住居跡が38軒で主体となっている。

ここでは、今回調査された竪穴住居跡を『下小池遺跡』で報告されている「古墳時代の時期区分と集落の変遷」に加筆することでまとめたい。

『下小池遺跡』では「古墳時代の時期区分と集落の変遷」について出土土器を基準として、各遺構を第1期から第6期まで区分している。

「1期」の遺構は4軒が該当し、4世紀前半に比定している。

「2期」の遺構は5軒が該当し、微妙に時期が前後していることも指摘しつつも4世紀後半としている。

「3期」の遺構は14軒が該当し、5世紀中葉に比定している。

「4期」の遺構は12軒が該当し、5世紀後葉に比定した上で、台地の広がりや住居跡の時期を考え、東部の一部の集落は下小池東遺跡へと続く一大集落であったと想定している。

「5期」の遺構は6軒が該当し、これらの遺構から出土した土器は古墳時代中期末から後期初頭の過渡期の様相を呈しており、5世紀末葉から6世紀初頭としている。

「6期」の遺構は2軒が該当し、6世紀前葉としている。

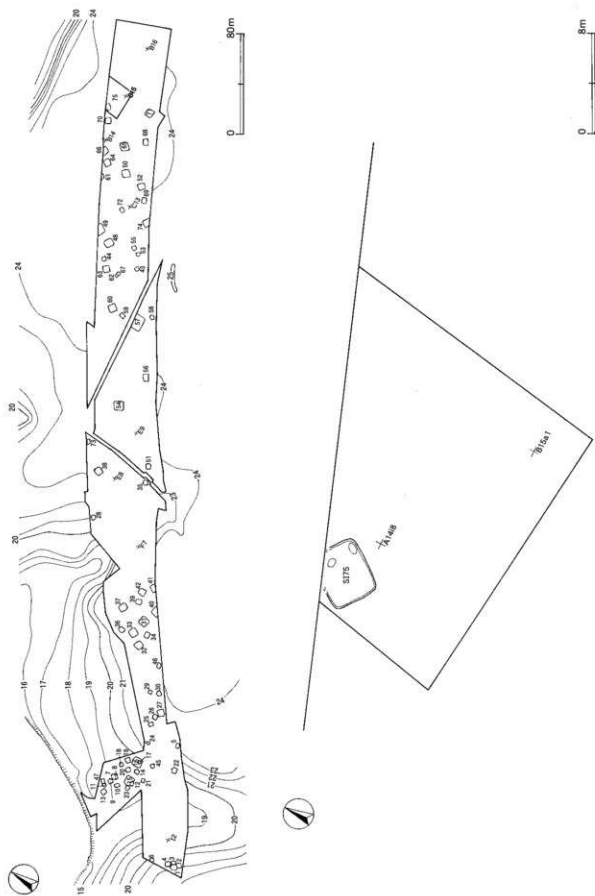
「1期」に比定されている4軒（第49・56・66・70号住居跡）の中で、第56号住居跡以外の3軒は調査区東側の標高約23.9～24.5mほどの台地上に位置している。今回調査された第75号住居跡は、第66・70号住居跡の東側に位置しており、主軸方向はN-42°-Eで、第66号住居跡の主軸方向と近似している。遺物は、ハケ目調整後擦り消された高坏の坏部や平底で胴部下がやややすばまる形の甕、壺などが出土しており、高坏は第49・56号住居跡から出土している高坏の坏部下端の形状に類似点を見いだすことができる。また、第49号住居跡を除く3軒と同様に、炉は中央部やや北東寄りに設置され、貯蔵穴は南東壁際に位置しているという共通点がある。遺物の特徴や室内施設の配置などから、第75号住居跡は『下小池遺跡』の「第1期」に相当すると考えられる。

註

- 1) 小竹茂美「下小池遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第210集 2004年3月

参考文献

- ・ 浅井哲也「茨城県における古墳時代前期の土器」『領域の研究—阿久津久先生選集論集』2003年4月



第7図 下小池遺跡遺構全体図

第4章 大日遺跡

第1節 遺跡の概要

大日遺跡は、茨城県稲敷郡阿見町大字吉原字馬立1712番地の1ほかに所在し、桂川支流の左岸、標高15～26mほどの河岸段丘及び台地上に立地している。平成14年度には4,097㎡が調査され、縄文時代の陥し穴2基、奈良時代・平安時代の竪穴住居跡16軒、平安時代の火葬墓2基、土坑1基の他に、時期不明の方形竪穴遺構2基、溝跡3条、土坑10基などが確認され、縄文時代から平安時代までの複合遺跡であることが判明している。出土遺物は、縄文土器片、土師器（高坏・高台付坏・高台付皿・甕・小形甕）、須恵器（坏・高台付坏・高台付皿・鉢・甕・瓶）、墨書土器、灰軸陶器（短頸壺・長頸壺・水瓶）、土製品（支脚）、石製品（有孔円板）、石器（打製石斧・剥片）金属製品（刀子・鐵・帯金具）などが出土している。

今回の調査面積は503㎡で、調査前の現況は畑地である。調査の結果、平安時代の竪穴住居跡2軒の他に、時期が特定できない竪穴住居跡1軒、土坑9基、溝跡1条が確認された。遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）で7箱分が出土した。主な出土遺物は、縄文土器片、土師器（坏・甕・小形甕）、須恵器（坏・高台付坏・盤・蓋・鉢・甕・瓶）、墨書土器、土製品（紡錘車・支脚・不明土製品）、石器（尖頭器・剥片）、金属製品（刀子・鎌・刀装具）などである。

第2節 基本層序

14年度の調査でB 2h6区にテストピットを設定し、基本土層の堆積状況の観察を行った。テストピットの地表面の標高は23.2mで、地表から約1.7mほど掘り下げ、第8図のような堆積状況を確認したが、北側は第1層から4層にかけて攪乱を受けている。

以下、テストピットの観察から層序を説明する。

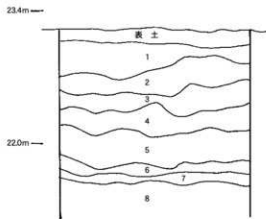
第1層は、ローム粒子を極めて多量に含む褐色のソフトローム層である。粘性は普通であるが、縮まりは強く、層厚は35cm前後である。

第2層は、第1層よりもやや明るい褐色のソフトローム層で、白色粒子と黒色粒子をそれぞれ微量含んでいる。粘性、縮まりともに普通で、層厚は12～34cmである。

第3層は、第2層よりは若干暗い褐色のソフトローム層で、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子をそれぞれ微量含んでいる。粘性は普通であるが、縮まりが強く、層厚は8～32cmで、堆積状況が一定ではない。

第4層は、第3層よりは若干明るい褐色のハードローム層で、白色粒子・黒色粒子・赤色粒子をそれぞれ微量含んでいる。粘性、縮まりともに強く、層厚は18～40cmで、堆積状況が一定ではない。

第5層は、第4層よりも若干暗い褐色のハードローム



第8図 基本土層図

層で、黒色粒子と赤色粒子をそれぞれ微量含んでいる。粘性、締まりともに強く、層厚は27～37cmである。

第6層は、第5層よりもやや明るい褐色のハードローム層で、褐鉄粒を少量含んでおり、白色粒子・黒色粒子も微量含まれている。粘性、締まりともにかなり強く、層厚は4～15cmである。

第7層は、褐鉄粒を中量、黒色粒子を微量含む淡い褐色のハードローム層である。粘性、締まりともに強く、厚さは4～14cmである。この層は、粘土ブロックも少量含んでおり、常総粘土層の漸移層と考えられる。

第8層は、褐鉄粒を中量、白色粒子・黒色粒子を少量含むぶい褐色の粘土層で、粘性は極めて強く、締まりも強い。層厚は未掘のため確認できなかったが7層よりも粘土の含有量が多く常総粘土層と考えられる。

遺構は、2層及び3層から確認されている。

第3節 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡2軒が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第17号住居跡（第9～11図）

位置 調査区南東部のD4f0区で、標高14.4mほどの低位段丘上の緩やかな南東斜面部に立地している。

重複関係 第18号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸4.50m、短軸3.95mほどの長方形で、主軸方向はN-38°-Wである。壁高は42～55cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。また、竈の右側に砂質粘土を貼った棚状施設を有している。

床 ほほ平坦な貼床である。出入り口ピットの周囲から竈付近にかけて踏み固められており、壁溝は竈側壁を除いて周回している。掘り方部分には4～26cmほどロームブロックを主体とした床材を貼っている。また、中央部には深さ40cmほどの土坑状の掘り込みがあった。

貼り床土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|------|------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 | 3 褐色 | ロームブロック多量、焼土ブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土粒子・炭化物・粘土ブロック少量 | | |

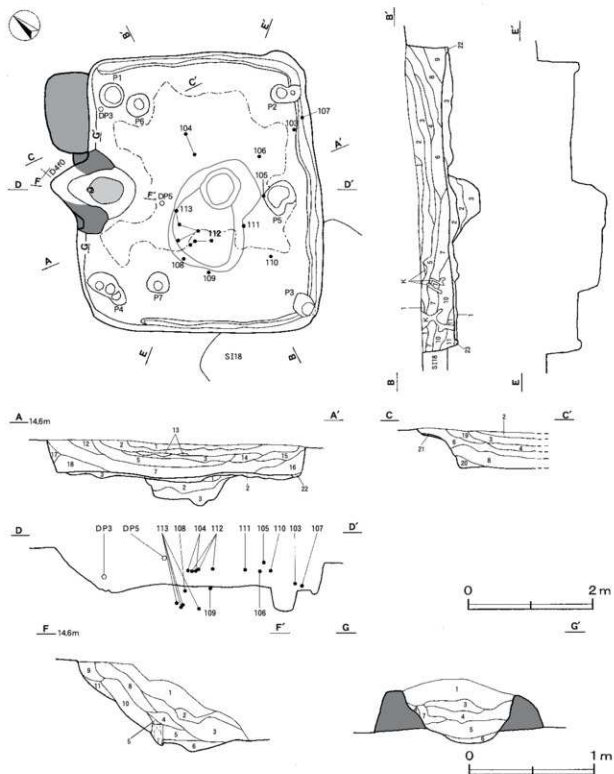
土坑状施設土層解説

- | | | | |
|--------|--------------------|--------|-----------------------------|
| 1 に赤褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量 | 3 に赤褐色 | ロームブロック・粘土ブロック中量、炭化物・焼土粒子少量 |
| 2 褐色 | ロームブロック中量、粘土ブロック少量 | | |

竈 北西壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部までは137cmである。袖部幅は139cmで、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は、袖部と同様の地山面を9cmほど皿状に掘りくぼめて使用し、赤変硬化している。煙道部は壁外に40cmほど掘り込まれており、煙道は火床面から緩やかに立ち上がっている。火床面に砂質粘土で作られた支脚の一部が確認できた。第2層は天井部の崩落土である。

竈土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------------------|---------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂質粘土粒子少量、ロームブロック・炭化物粒子微量 | 7 に赤褐色 | 焼土粒子多量、砂質粘土粒子中量 |
| 2 に赤褐色 | 砂質粘土粒子中量、ローム粒子微量 | 8 暗褐色 | 砂質粘土粒子中量、焼土粒子・炭化物微量 |
| 3 黒褐色 | 砂質粘土粒子少量、焼土ブロック・炭化物粒子微量 | 9 黒褐色 | 炭化物少量、ローム粒子・砂質粘土粒子微量 |
| 4 に赤褐色 | 焼土ブロック少量 | 10 暗赤褐色 | 炭化物中量、焼土粒子・砂質粘土粒子少量、ロームブロック微量 |
| 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、砂質粘土粒子・灰少量、炭化物粒子微量 | 11 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物・砂質粘土粒子微量 |
| 6 に赤褐色 | 焼土ブロック・砂質粘土粒子少量、炭化物・ロームブロック微量 | | |



第9図 第17号住居跡実測図

棚状施設 竈右側に設けられており、奥行70cm前後、幅135cm前後の長方形で、床面から40cmほどの高さで確認することができた。構築状況は、住居の掘り込み後に棚状施設部分を掘り込み、覆土第21層に相当する砂質粘土を貼り付けたと考えられる。また、棚状施設の粘土材にはふい黄橙色で砂粒が多く、竈材との違いが明確である。

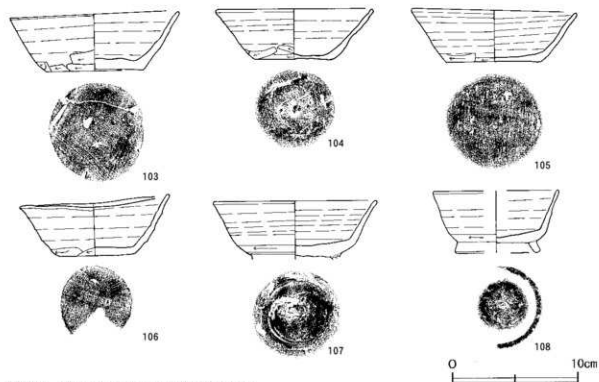
ピット 7か所。P1～P4は配置から主柱穴と考えられ、深さは33～67cmである。P5は深さ37cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さ33～43cmで、それぞれ主軸に沿って主柱穴と直線的に配置されていることから補助的な役割を果たしていたことが想定できるが明確ではない。

覆土 23層からなる。焼土ブロックやロームブロックを含んでいるが、レンズ状の堆積状況を示す自然堆積である。

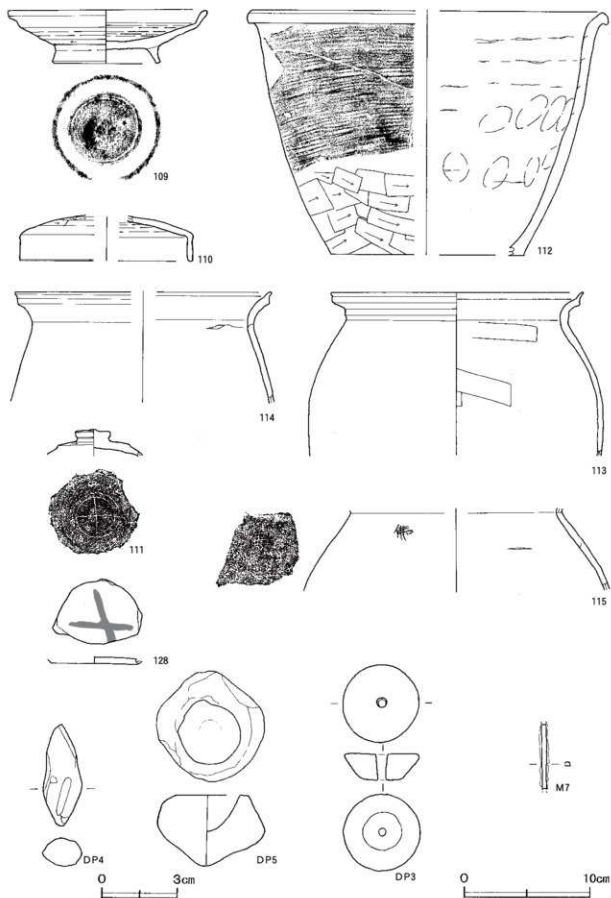
土層解説

1 黒褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量	13 暗褐色	粘土粒子中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
2 暗褐色	焼土ブロック少量、ローム粒子・粘土粒子微量	14 暗褐色	炭化物少量、ローム粒子・焼土粒子微量
3 極暗褐色	焼土ブロック少量、ロームブロック・炭化物微量	15 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子少量	16 褐色	ローム粒子・粘土粒子少量、炭化物・焼土粒子微量
5 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・粘土粒子微量	17 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
6 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	18 暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子少量、炭化物・粘土粒子微量
7 暗褐色	炭化物少量、焼土ブロック・ローム粒子微量	19 暗褐色	ロームブロック少量、粘土粒子微量
8 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック・炭化物微量	20 にごり褐色	砂質粘土粒子少量、ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子微量
9 褐色	焼土粒子・粘土粒子少量	21 にごり褐色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量
10 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量	22 暗褐色	ローム粒子少量
11 黒褐色	ロームブロック微量	23 極暗褐色	ロームブロック・粘土粒子微量
12 褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック微量		

遺物出土状況 土師器片999点（坏類80、甕類919）、須恵器片829点（坏類473、盤49、蓋46、甕類261）、土製品4点（紡錘車1、不明土製品3）、鉄製品3点（釘カ）の他に、混入したと考えられる縄文土器片17点が出土している。103・107は東コーナー部の壁際、108・109は中央部南西寄りの床面からそれぞれ出土し、住居に伴うと考えられる。また、113は掘り方内から出土しており、覆土中から出土している114と形状が酷似している。これらには時期差が見られないことから、土坑状の掘り込みは住居構築時に掘られている可能性が高い。115は体部上位に「佛」の刻書がある。多くの遺物が覆土第4・5層より上位で出土していることから、埋没の過程で投棄されたものと考えられる。DP4は覆土中、DP5は覆土上層からの出土で、祭祀具と考えられる。所見 出土土器から、時期は9世紀前葉と考えられる。また、「佛」と刻書された土師器甕から、当遺跡周辺に宗教に関わる施設が存在したことを想定することができる。



第10図 第17号住居跡出土遺物実測図(1)



第11图 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

第17号住居跡出土遺物観察表(第10・11図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
103	須恵器	坏	13.6	4.7	7.8	長石・石英・黒色粒子	褐色	普通	底部回転ヘラ切り後一方向へのヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	床面	95% PL2
104	須恵器	坏	12.4	4.1	5.8	長石・石英・雲母	に染み黄褐色	普通	底部回転ヘラ削り後一方向へのヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	覆土中層	90% PL2
105	須恵器	坏	13.1	4.3	7.5	長石・石英・雲母・黒色粒子	浅黄	普通	底部回転ヘラ切り後一方向へのヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	覆土上層	70% PL2
106	須恵器	坏	11.8	4.8	5.7	長石・石英・黒色粒子	に染み褐色	普通	底部回転ヘラ削り後一方向へのヘラ削り、体部下端手持ちヘラ削り	覆土中層	70% PL2
128	須恵器	坏	—	(0.6)	[7.0]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後一方向へのヘラ削り	覆土中	5% [+]
107	須恵器	高台付坏	12.9	(4.7)	—	長石・石英・雲母	灰褐色	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け、体部下端回転ヘラ削り	床面	90% PL3
108	須恵器	高台付坏	[10.0]	5.0	[6.1]	長石・石英・雲母	黄灰	普通	底部回転ヘラ削り後高台貼り付け、体部下端回転ヘラ削り	床面	50%
109	須恵器	盤	15.8	4.3	8.1	長石・石英・雲母	褐色	普通	底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り、体部下端回転ヘラ削り後高台貼り付け	床面	80% PL3
110	須恵器	蓋	[13.8]	(3.6)	—	長石・石英・黒色粒子・針状鉱物	褐色	良好	天井部ヘラ削り、外面自然積	覆土中層	50%
111	須恵器	蓋	—	(2.0)	—	長石・石英・雲母	灰	良好	天井部ヘラ削り	覆土中層	20% 別番 PL4
112	須恵器	鉢	[27.9]	19.4	[15.2]	長石・石英・雲母	明褐色	普通	体部外面横位の平行引き、体部下端ヘラ削り、体部内面指頭削、輪積み少量	覆土中層	20%
113	土師器	甕	20.0	(13.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	に染み褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ、輪積み少量	覆土中層	10%
114	土師器	甕	[20.4]	(8.8)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	口辺部内・外面横ナデ、輪積み少量	覆土中	5%
115	土師器	甕	—	(6.6)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	普通	体部外面厚減調整不明、輪積み少量	覆土中	5% (補) 別番 PL4

番号	器種	径	孔径	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP3	紡錘車	6.2	0.7	2.1	66.1	粘土(長石・石英・雲母)	丁寧なナデ	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP4	土製品	4.0	1.6	1.2	6.4	粘土(長石・石英)	ナデ、両端部が磨る	覆土中	祭祀具カ

番号	器種	幅	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP5	土製品	4.3	2.8	—	37.8	粘土(長石・石英・雲母)	体部外面下端ナデ、内面ナデ、指頭削	覆土上層	祭祀具カ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M7	釘	(5.2)	0.4	0.4	(4.8)	鉄	断面は方形の棒状、頭部屈曲、角釘カ	覆土中	

第19号住居跡(第12～15図)

位置 調査区南東部のD4e9区で、標高14.7mほどの低位段丘上の緩やかな南東斜面部に立地している。

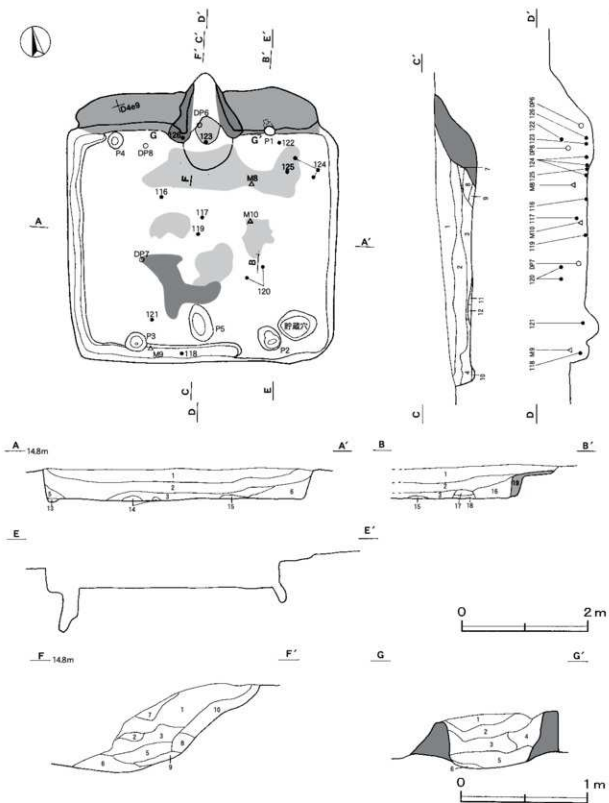
規模と形状 一边が4.35m前後の方形で、主軸方向はN-17°-Eである。壁高は22～50cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。また、竈の両側に砂質粘土を貼った棚状施設を有している。

床 平坦であるが、硬化面は確認できなかった。壁溝が西側と南側の一部に確認されている。

竈 北壁の中央部に付設されており、焚き口から煙道部までは156cmである。左袖部が若干遺存しており、須恵器の甕が竈構築材として転用されている。断ち割りの状況などから袖部幅は125cm前後で、床面と同じ高さの地山面に構築されていたと想定される。火床部は7cmほど皿状に掘りくぼめて使用し、赤変硬化している。また、壁外への掘り込みは35cmほどで、煙道は火床部から外傾して緩やかに立ち上がっている。

竈土層解説

1	暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック・ローム粒子・炭化物少量	6	暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子中量、ローム粒子少量
2	暗褐色	焼土ブロック・砂質粘土ブロック中量、ロームブロック・炭化物少量	7	暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子少量
3	暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化物・砂質粘土粒子少量	8	に染み褐色	砂質粘土粒子多量、焼土粒子中量、炭化物少量
4	暗褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量、砂質粘土粒子少量	9	褐色	焼土粒子・炭化粒子少量
5	に染み褐色	焼土ブロック・ローム粒子・炭化粒子中量、白灰少量	10	に染み褐色	焼土ブロック・炭化物中量



第12図 第19号住居跡実測図

棚状施設 竈を中心として左右に設けられており、左側は奥行45cm前後、幅160cm前後で、右側は奥行65cm前後、幅140cm前後であり、床面から45cmほどの高さで確認することができた。構築状況は、住居の掘り込み後に棚状施設部分を掘り込み、覆土第19層に相当する砂質粘土を棚部分で3～4cmほど、壁部分で7～11cmほど貼り付けている。この粘土材は砂粒が多く、竈材の粘土との違いが明確である。

ピット 5か所。P1～P4は配置から支柱穴と考えられ、深さは39～62cmである。P5は深さ24cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。

貯蔵穴 南東コーナー部に位置し、長径62cm、短径48cmの楕円形で、深さは18cmである。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

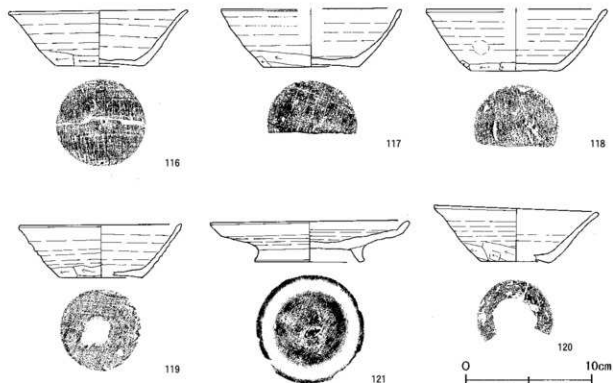
覆土 19層からなる。覆土下層や床面の焼土や炭化物は、住居の廃絶直後に投げ込まれたものであるが、その後は自然に堆積したと考えられる。

土層解説

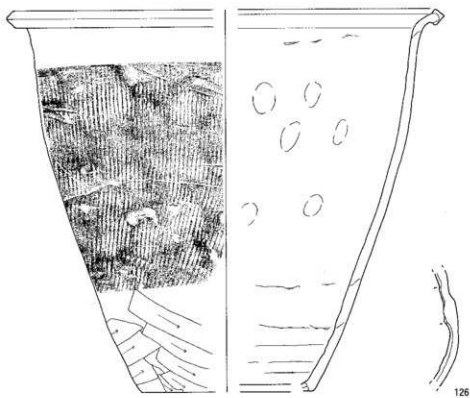
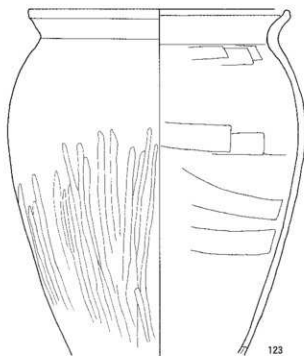
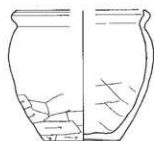
1 暗褐色	焼土粒子少量、ロームブロック・炭化物微量	10 暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック少量、炭化物・砂質粘土粒子微量	11 極暗褐色	焼土粒子中量、ローム粒子微量
3 極暗褐色	焼土粒子少量、炭化粒子微量	12 極暗褐色	炭化物中量、ロームブロック・焼土粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂質粘土粒子微量	13 暗褐色	ローム粒子・焼土粒子微量
5 黒褐色	ローム粒子少量	14 暗赤褐色	焼土粒子中量
6 褐色	ローム粒子中量、焼土粒子微量	15 暗赤褐色	焼土ブロック中量、炭化粒子微量
7 に黄褐色	焼土ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量	16 暗褐色	ロームブロック・焼土ブロック微量
8 明赤褐色	焼土ブロック多量、炭化粒子・砂質粘土粒子少量	17 暗赤褐色	焼土粒子中量、炭化粒子微量
9 暗赤褐色	焼土ブロック・炭化粒子微量	18 褐色	ローム粒子少量、焼土ブロック・炭化物微量
		19 灰黄色	砂質粘土粒子中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片188点（坏類57、甕類131）、須恵器片687点（坏類520、盤12、蓋26、甕類129）、土製品4点（支脚1、不明土製品3）、鉄製品6点（鎌1、刀子1、刀装具1、釘2、鉄滓1）の他に、混入したと考えられる縄文土器片13点が出土している。116・119は中央部、121は南西コーナー寄り、124・125は北東コーナー付近の床面からそれぞれ出土している。また、120は、119と同じように焼成後に底部に穿孔されているが、覆土上層からの出土であり、投棄されたものである。DP7は覆土下層、DP8は覆土上層、DP9は覆土中からそれぞれ出土しており、祭祀具と考えられる。

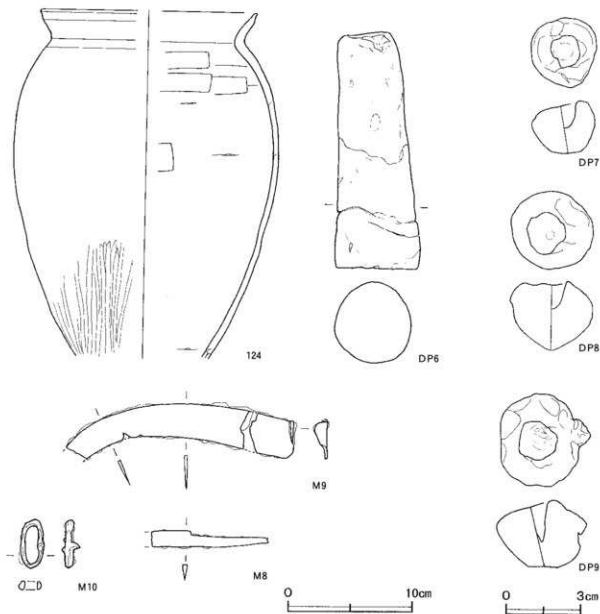
所見 DP7～9は祭祀遺物と判断したが、出土層位が違うことから本跡に伴うとは考えられない。また、床面近くから焼土と炭化材が出土しているが、出土状況はブロック状に塊っており、床面には焼けた痕跡が見られなかったことから人為的に投げ込まれたものと判断した。出土遺物から、時期は9世紀中葉と考えられる。



第13図 第19号住居跡出土遺物実測図(1)



第14图 第19号住居跡出土遺物実測図(2)



第15図 第19号住居跡出土遺物実測図(3)

第19号住居跡出土遺物観察表(第13～15図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
116	須恵器	坏	14.1	4.5	7.0	長石・石英・雲母 母・黒色粒子	灰黄	普通	底部回転へら切り後一方方向のへら削り、体部下端を持ちへら削り	床面	90% PL3
117	須恵器	坏	[14.2]	4.6	7.6	長石・石英・雲母・黒色粒子	灰褐	普通	底部回転へら切り後一方方向のへら削り、体部下端を持ちへら削り	覆土中層	40%
118	須恵器	坏	[14.2]	4.9	7.0	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底部回転へら切り後一方方向のへら削り、体部下端を持ちへら削り、体部外面中央部削痕	覆土下層	40%
119	須恵器	坏	12.7	4.3	6.7	長石・石英・雲母・黒色粒子	黄灰	普通	底部回転へら切り後一方方向のへら削り、体部下端を持ちへら削り、底部内面からの削成後器口	床面	80% PL3
120	須恵器	坏	12.9	4.5	5.4	長石・石英・雲母	明褐色	普通	底部へら削り、体部下端を持ちへら削り、底部内面からの削成後器口	覆土上層	40% PL3
121	須恵器	甕	15.8	3.3	8.6	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	底部回転へら削り後回転へら削り、高直削り付	床面	60% PL3
122	須恵器	甕	15.0	4.0	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	褐色	良好	天井部へら削り、内面自然焼	覆土上層	95% PL3
123	土師器	甕	20.6	(27.5)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	体部外面下部へら削り後へら削り、口辺部内・外面削り、体部内面へら削り	覆土中層	40%
124	土師器	甕	[17.4]	(28.0)	—	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	体部外面下部へら削り後へら削り、口辺部内・外面削り、体部内面へら削り、輪縁のみ	床面	30%
125	土師器	小形甕	[10.1]	10.4	5.7	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	体部外面下部へら削り、口辺部内・外面削り、体部内面へら削り、輪縁のみ、底部本器口	床面	60%
126	須恵器	甕	[33.6]	30.2	[13.7]	長石・石英・雲母	褐色	普通	体部外面下部へら削り、体部内面削痕直、輪縁のみ	覆土袖部材	30%

番号	器種	長さ	径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP6	支脚	19.0	4.0~7.0	840.8	粘土(長石・石英)	丁寧なナデ	壺内覆土下層	

番号	器種	幅	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
DP7	土製品	2.6	2.0	—	12.3	粘土(長石・石英・雲母)	体部外面ナデ	覆土下層	祭祀具カ
DP8	土製品	3.3	2.7	—	21.8	粘土(長石・石英・雲母)	体部外面ナデ	覆土上層	祭祀具カ
DP9	土製品	3.8	2.7	—	28.9	粘土(長石・石英・雲母)	体部外面ナデ	覆土中	祭祀具カ

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M8	刀子	(9.5)	1.2	0.4	(12.4)	鉄	刀身・基部の一部、切先・基部欠損	覆土中層	
M9	鎌	(18.2)	3.1	0.3	(56.7)	鉄	弓状に彎曲、断面形は三角	覆土上層	
M10	刀器具	3.9	2.0	1.5	6.6	鉄	丁寧な研磨	覆土下層	PL4

表2 竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面 構造	内部施設				覆土	主な出土遺物	時期	新旧関係 (旧→新)
							柱	土	竈	貯蔵				
17	D410	N-38°-W	長方形	4.80×3.95	42~55	平土 土間	4	1	2	1	—	自然 土師器、須恵器	9世紀前半	S18→本跡
19	D469	N-17°-E	方形	4.35×4.30	22~50	平土 平土	4	1	—	1	1	自然 土師器、須恵器	9世紀中葉	

2 その他の遺構と遺物

出土遺物が無いため時期及び性格を判断することができなかった竪穴住居跡1軒、土坑9基、溝跡1条を
確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

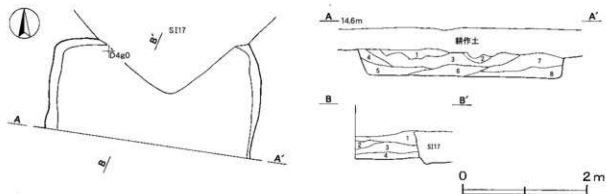
(1) 竪穴住居跡

第18号住居跡 (第16図)

位置 調査区南東部のD4g0区で、標高14.1mほどの低位段丘上の緩やかな南東斜面部に立地している。

重複関係 北側を第17号住居に掘り込まれている。

規模と形状 南側は調査区域外に延びているため全体を確認することはできなかったが、長軸3.36m、短軸は1.78mほどが確認され、方形または長方形と推察される。主軸方向はN-82°-Wである。確認された壁高は30~42cmで、外傾して立ち上がっている。



第16図 第18号住居跡実測図

床 平坦である。硬化面は確認できなかった。

覆土 8層からなる。ロームブロックや焼土ブロックを含み、ブロック状の堆積状況を示す人為堆積である。

土層解説

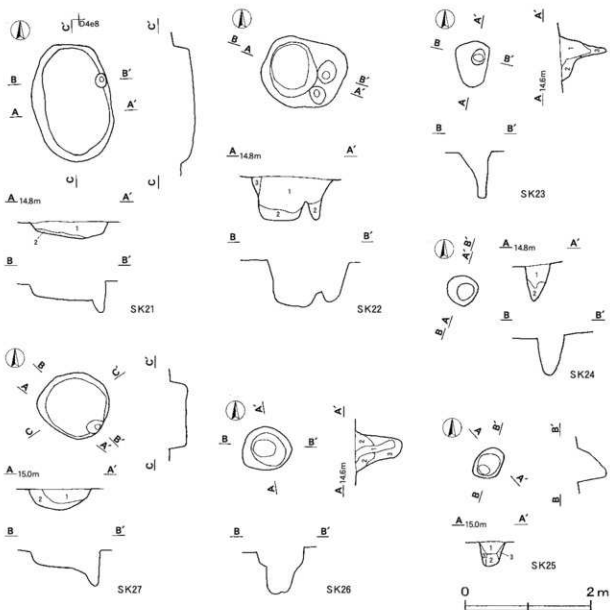
- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック・焼土ブロック少量 | 5 黒褐色 炭化粒子中量、ロームブロック少量 |
| 2 暗褐色 炭化粒子多量、焼土ブロック・ローム粒子少量 | 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子中量 |
| 3 赤褐色 焼土ブロック・炭化粒子中量 | 7 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 4 黒褐色 炭化粒子中量、ローム粒子・焼土粒子微量 | 8 暗褐色 ロームブロック中量、炭化粒子少量 |

遺物出土状況 縄文土器片12点(深鉢類), 土師器片14点(環類3, 甕類11), 須恵器片8点(環類2, 蓋1, 甕類5)が出土しているが, 細片のため図示することはできない。

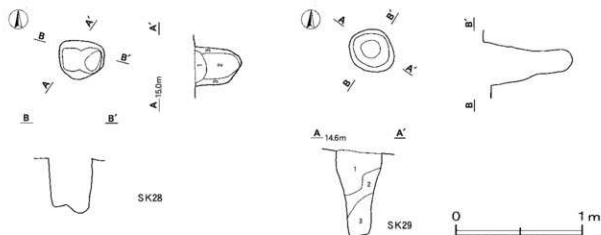
所見 時期を決定づける遺物が出土していないが, 覆土中の出土遺物などから9世紀以前であると考えられる。

(2) 土坑

ここでは, 時期及び性格が不明な土坑について土層解説を記述し, 一覧表を記載する。



第17図 土坑実測図(1)



第18図 土坑実測図(2)

第21号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量

第22号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・粘土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第23号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量

第24号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量

第25号土坑土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量

第26号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

第28号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第29号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

表3 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	辺長(m) (長径×短径)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 新記録係(旧→新)
21	D4e7	N-10°-W	楕円形	1.86×1.26	30	外傾	平坦	不明	縄文土器	
22	D4c3	N-75°-W	楕円形	1.28×1.08	70	外傾	凹凸	人為	縄文土器・土師器・須恵器	
23	D4e7	N-12°-E	不整形円形	0.73×0.54	75	縁部・外傾	平坦	人為	土師器・須恵器	
24	D4d6	—	円形	0.50×0.48	66	外傾	U字状	人為	土師器	
25	D4d6	N-28°-E	楕円形	0.57×0.44	46	外傾	皿状	人為	土師器	
26	D4d5	N-90°-E	楕円形	0.80×0.68	71	外傾	平坦	人為	土師器	
27	D4b3	—	円形	1.14×1.06	66	外傾	平坦	自然	縄文土器・土師器・須恵器	
28	D4d7	N-84°-W	不整形円形	0.36×0.30	46	垂直	凹凸	人為	—	
29	D4e2	N-56°-W	楕円形	0.38×0.32	69	外傾	平坦	人為	—	

(3) 溝跡

第4号溝跡(第19図)

位置 調査区のD4d7～D4e7区で、標高14.5mほどの低位段丘上の緩やかな南東斜面部に立地している。

規模と形状 北側は後世の攪乱を受けているため遺構全体を確認できなかったが、D4d7区から南西方向(N-160°-W)へ直線的に伸びている。確認された長さは3.23mで、上幅0.45~0.55m、下幅0.27~0.45m、深さ5~8cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

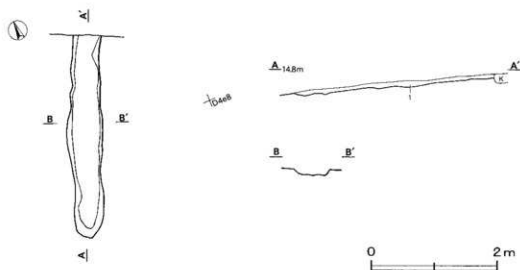
覆土 単一層であるため堆積状況は不明である。

土層解説

1 黒褐色 ロームブロック少量、粘土粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片2点(深鉢類)、土師器片14点(坏9、甕類5)、須恵器片12点(坏6、甕6)が出土しているが、いずれも細片であるため図示することはできない。

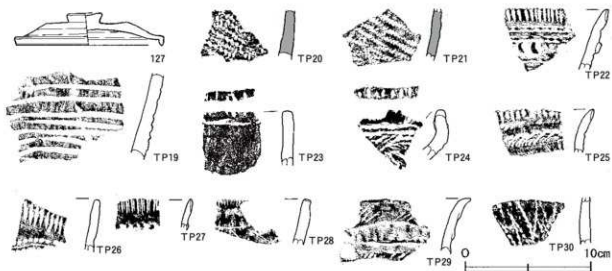
所見 時期を決定できる遺物が出土していないため、時期及び性格は不明である。



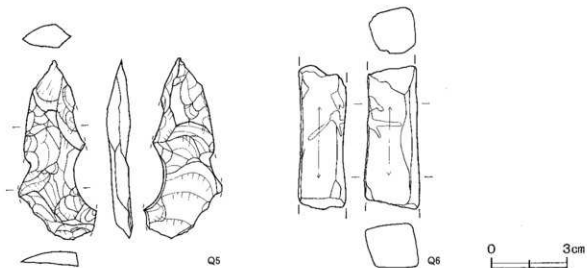
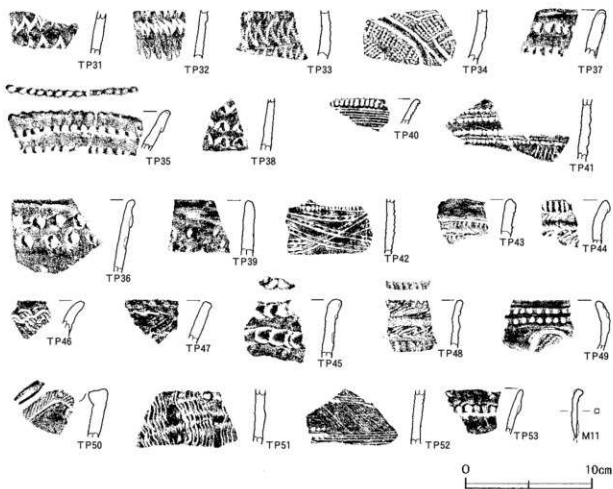
第19図 第4号溝跡実測図

(4) 遺構外出土遺物

当遺跡から出土した遺構に伴わない主な遺物について、実測図及び出土遺物観察表に記載する。



第20図 遺構外出土遺物実測図(1)



第21圖 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第20・21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
127	須恵器	蓋	11.8	2.6	—	長石・石英	黄灰	良好	天弁部へラ削り	D4区確認面	50%

番号	種別	器種	文様・手法の特徴						出土位置	備考
TP19	縄文土器	深鉢形	太い沈線文						D4区確認面	早期中葉 PL4
TP20・21	縄文土器	深鉢形	20はR.Lの単節縄文施文、21はL.Rの単節縄文施文						D4区確認面	前期前葉 PL4
TP22～27・29・44	縄文土器	深鉢形	①口部・胴中の縦筋目 ②口部・胴中縦筋文(2区あり) ③口部・胴中縦筋文(2区あり) ④口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑤口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑥口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑦口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑧口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑨口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑩口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑪口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑫口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑬口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑭口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑮口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑯口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑰口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑱口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑲口部・胴中縦筋文(2区あり) ⑳口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉑口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉒口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉓口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉔口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉕口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉖口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉗口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉘口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉙口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉚口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉛口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉜口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉝口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉞口部・胴中縦筋文(2区あり) ㉟口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊱口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊲口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊳口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊴口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊵口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊶口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊷口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊸口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊹口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊺口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊻口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊼口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊽口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊾口部・胴中縦筋文(2区あり) ㊿口部・胴中縦筋文(2区あり)						D4区確認面	前期後葉 PL4
TP28	縄文土器	深鉢形	口唇部にのみ 細い沈線文						D4区確認面	前期後葉
TP30～TP34	縄文土器	深鉢形	30～33は貝殻残文 34は比羅区内貝殻残文充填						D4区確認面	前期後葉 PL4
TP35～TP39	縄文土器	深鉢形	半截竹管や棒状工具による刺突文を有する土器群						D4区確認面	前期後葉 PL4
TP40～TP43・45	縄文土器	深鉢形	半截竹管による平行沈線文や有節沈線文を有する土器群						40～42:D4区確認面 43・45:D4区確認面	前期後葉 PL4
TP46～48	縄文土器	深鉢形	46・47は縦線文施文 48は無節縄文						D4区確認面	中期初葉
TP49	縄文土器	深鉢形	口辺部円形刺突文 刷附磨文						D4区確認面	中期後葉 PL4
TP50	縄文土器	深鉢形	口唇部沈線区内縄文充填						D4区確認面	中期後葉
TP51・52	縄文土器	深鉢形	棚田状沈線文						51:D4区確認面 52:D5区確認面	後期前葉
TP53	弥生土器	煮物	複合口縁 口縁部下部に棒状工具による押圧						D4区確認面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q5	尖頭器	7.1	3.1	0.9	(12.7)	頁岩	主要側面を基調とし、両側部を調整。一部欠損後二次利用目的で調整跡	D4区確認面	
Q6	砥石	6.7	2.2	1.8	(32.4)	凝灰岩	砥面4面	D4区確認面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M11	釘	0.5	1.2	0.4	(12.4)	鉄	断面は方形の棒状	覆土中	

番号	銭名	径	孔	幅	重量	約押年	材質	特徴	出土位置	備考
M12	寛永通寶	2.81	0.65	4.8	1789		銅	西文銭、11波	D5区確認面	

第4節 ま と め

大日遺跡は、平成14年7月から平成15年10月にかけて4,097㎡が調査され、『茨城県教育財団文化財調査報告書』第212集として報告されている(以下、『大日遺跡¹⁾』と略す)。

『大日遺跡』では、縄文時代の陥し穴2基、奈良・平安時代の堅穴住居跡16軒、火葬墓2基、土坑1基、時期不明の方形堅穴遺構2基、土坑10基、溝跡3条であり、棚状施設を有する住居跡10軒が検出されている。また、黒笹14号窯式に比定される灰陶器長頸壺と黒笹90号窯式に比定される灰陶器短頸壺をそれぞれ骨蔵器とした火葬墓も2基検出され、注目された。

ここでは、棚状施設が確認された第17・19号住居跡と出土遺物について述べ、まとめたい。

『大日遺跡』では、棚状施設を有する住居跡6軒、また、竈側の壁に砂質粘土が貼り付けられていることから棚状施設をもつ可能性が想定できる住居跡4軒の、計10軒が報告されている。その中で、9世紀前葉に比定される4軒の住居跡はいずれも西竈であり、棚状施設は竈に向かって右側に設けられている²⁾。9世紀中葉から後葉に比定される6軒の住居跡はすべてが北竈であり、棚状施設は竈の両側に設けられていることが確認されている。

今回調査された第17号住居跡(9世紀前葉)の主軸はN-38°-Wであり、『大日遺跡』で報告された4軒(68°~74°)よりも主軸方向がやや北に寄っているが、竈は北西壁の中央部に位置しており、竈右側に棚状施設が検出された。遺物は、土器器残も出土しているが須恵器が多い。また、覆土中からではあるが「佛」と刻書された土器器残片も出土している。

前回調査された第12号住居跡からは瓦塔片が出土しており、さらに、隣接する花房遺跡からは「多寺」と記された墨書土器が出土していることなどから、『大日遺跡』では両遺跡の調査区域外に村落内寺院などの仏教関連施設の存在を想定しており、今回の刻書「佛」の存在は、その可能性をさらに高めるといえる。

第19号住居跡の主軸はN-17°-Eであり、『大日遺跡』で報告されている6軒（北から東へ7～26°）とはほぼ同じであり、北竈の両側に棚状施設が確認されている。住居跡の時期については、出土遺物や『大日遺跡』の事例、北竈であること、竈の両側に棚状施設を有することなど、遺構の特徴から9世紀中葉と判断したが、底部が焼成後穿孔されている119や120の特徴などを見ると、9世紀中葉でも前葉に近い時期の可能性もあり、やや幅をもたせた。

今回調査された第17・19号住居跡を加えると、大日遺跡における棚状施設を有するのは12軒（63.1%）となり、「9世紀前葉では竈の竈右側に棚状施設を有する形態を示し、時期が下るにつれて竈両側に棚状施設を有する」という傾向にも変わりはない。また、棚状施設には「床面だけでなく竈穴壁の上端から外側の屋根際までの利用も可能なはずである³⁾」という指摘があるが、棚状施設が日常的に使用されていたのか、祭祀的な施設であるのか、決定的な遺物の出土がないため不明である。花房遺跡の第11号住居跡の左側棚状施設や『大日遺跡』の第12号住居跡の棚状施設からは日常什器である須恵器坏がそれぞれ正位の状態で、『大日遺跡』第3号住居跡からは大形で内面が黒色された土師器坏も出土しており、棚状施設が日常的に使用されていた状況を示すことができる。しかし、水戸市梶内遺跡⁴⁾では、「文珠」と墨書された土師器高台付坏が棚状施設から逆位で出土し、その報告では竈祭祀の可能性を指摘しているが、花房遺跡や大日遺跡の調査からはその方向性を示すことはできない。今後の調査事例の増加を待って更に検討を加えていく必要がある。

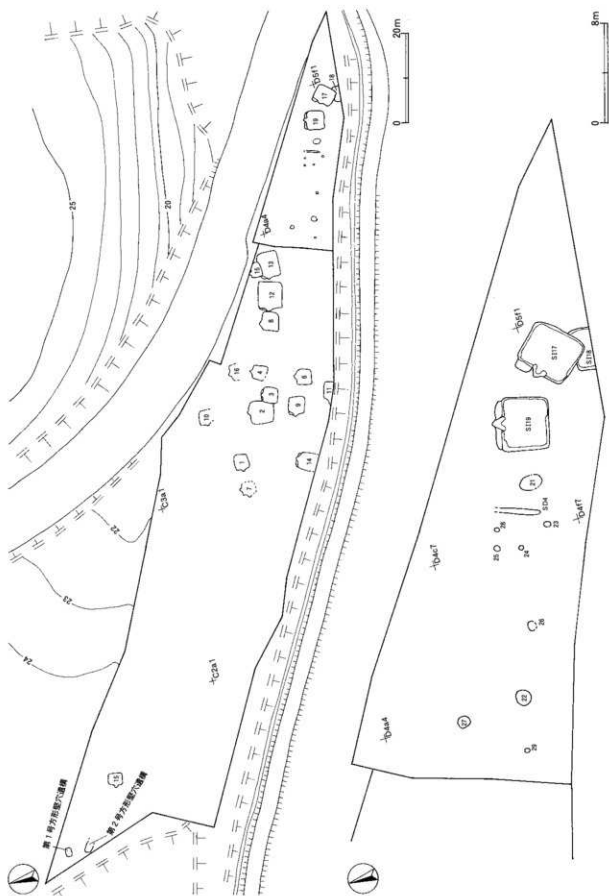
また、第17・19号住居跡からは、DP4・5、7～9が出土している。いずれの遺物も出土層位が違うことから当該住居跡に伴う祭祀行為とは考えにくい。DP4は、両端が徐々に細くなり、芋虫状を呈していることから「壺形土製品」の可能性も考えられ、養蚕に関わる祭祀行為が想定できる。DP5、7～9は「坏形土製品」と考えられ、豊饒を祈願する祭祀行為が想定できるが、他に祭祀行為を示す遺物が出土しておらず明確ではない。しかし、当時の人々が生産物の豊饒を祈願して行っていた小規模な祭祀行為が行なわれていたことを想定することは可能であろう。

註

- 1) 綿引英樹、後藤孝行「谷ノ沢遺跡・手接遺跡・花房遺跡・大日遺跡 一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第212集 2004年3月
- 2) 大日遺跡の第11号住居跡の南側は調査区域外であったため両側に棚状施設を有していることを確認することができなかった。当遺跡では、竈の両側に棚状施設を有する住居跡は北竈であり、第11号住居跡は第9・12・13号住居跡と同じように西竈であることから暫定的に竈右側のみの棚状施設と判断した。
- 3) 川津法伸「竈の脇に棚をもつ住居について」『研究ノート』第6号 茨城県教育財団 1997年6月
- 4) 樫村宣行「一般国道6号東水戸道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 梶内遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第100集 1995年6月

参考文献

- ・ 大竹憲治「壺形土製品寸考」『史峰』第十六号 1991年
- ・ 中山雅弘・廣岡敏「向山遺跡 弥生時代から平安時代の遺物包含層」『いわき市埋蔵文化財調査報告』第14集
いわき市教育文化事業団 1986年9月



第22圖 大日遺跡遺構全体図

写 真 图 版

下 小 池 遺 跡

大 日 遺 跡

下小池遺跡第75号
住居跡完掘状況



大日遺跡第17号
住居跡完掘状況



大日遺跡第19号
住居跡完掘状況



PL2



大日遺跡第1号住居跡，下小池遺跡第75号住居跡出土遺物



SI17 107



SI19 116



SI19 119



SI19 120



SI17 109



SI19 121

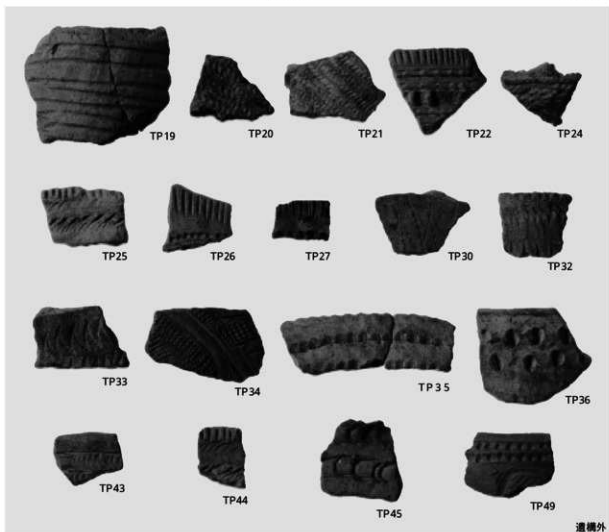
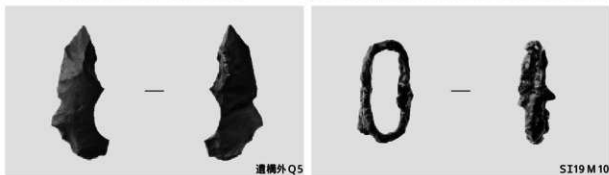
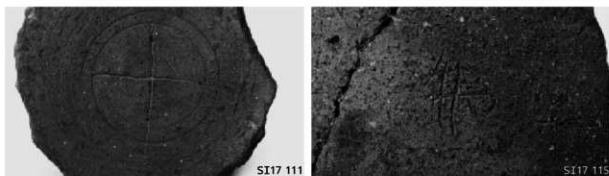


SI19 122



遺構外 127

PL4



大日遺跡第17・19号住居跡，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第252集

下小池遺跡 2
大日遺跡 2

一般国道468号首都圏中央連絡自動車道
新設工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 18(2006) 年 3月 20日印刷
平成 18(2006) 年 3月 24日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL. 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL. 029-252-8481